満月夜水詩

サイルレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
満月夜水詩

【Ｎコード】
Ｎ４５０６Ｑ

【作者名】
サイルレン

【あらすじ】
「満月には、煌びやかに水面に唄が浮かぶ。」河童と少女の切ないお話。

俺は月夜の下で歌うのが好きだった。

季節や天気、空気や気分によって色々な歌を歌う。
それが俺の日課だった。
夜には人っ子一人いない池で音を紡いでみせる。
きっと端から見れば、歌は宙に浮いて見えるだろう。声の主が見当たらないのだから。
今日も同じように、一人歌っているはずだった。

心地良く歌っている最中には気付かなかった、まさか人が近くにいることに。

「良い曲やね、お兄ちゃん！」

ぷつりと音が切れた瞬間、小さな女の子の声が聞こえた。
俺は驚いてそちらを見れば、ウサギのぬいぐるみを持った女の子がしゃがんでいた。
しまった、隠れていれば良かった。
俺は内心焦りながら、ニッコリ微笑んで言った。

「俺が見えるの？」
「おん、見えるよ？」

子供は鋭いんだから……なんて他人事みたいに思って、再び問い掛

けた。

「俺を見ても怖くないの？」

「怖くないで？お兄ちゃん、怖い人なん？」

「ううん。」

「もう一度歌ってや！」

子供特有の満面の笑みでそう言われてしまえば拒否など出来ない。俺は快く承諾した。

口から勝手にメロディが出てくる。その歌を、少女は静かに聴いていた。たった一人の観客だけれど、生まれて初めて人と交流した俺は凄く嬉しかった。

俺が心踊らせて歌えば、水はキラキラと輝いて、そして魚は愉しげに跳ねた。

その度少女の笑みが深くなっていく。

「心地良いねんな、お兄ちゃんの歌」

「ありがとう。」

「あんね、今日お友達と喧嘩してん。やから、落ち込んでてん。でも、お兄ちゃんのおかげで元気になった！」

「そうなんだ。じゃあ、またおいで？」

「おん！」

ニカッと笑うと、少女は少しだけ走り去り、途中で振り返って叫んだ。

「またね、河童さんのお兄ちゃん！」

俺は、少女が見えなくなるまで手を振った。

次の日も、その次も、ずっと俺と少女は逢った。
毎日、少女は起きたことを話してくれ、俺は歌った。
その度に「心地良い」と言ってくれ、俺は嬉しくなっていった。
来れない日は、何かしらの小さな花が置いてあった。
……だけど徐々に、そして確実に、来れない日が多くなっていった。
それはそうだろう、あれから2年も経てば。少女とは少しだけしか逢えなくなった。それはとても寂しくて。
俺はふと気付いた。少女は心の拠り所だったのだと。人外である自分を唯一受け止めてくれるから。
けれども、時は無情にも瞬く間に過ぎ、遂には二度と姿を現すことはなくなった。
最後に逢ったときに交わした言葉。

「わたし、また来るから。河童さんのお兄ちゃん、ちゃんと待ってて な？どこも行かんといてや。」

そして沢山の花を撒き散らして、去っていった。
流れる水が噂を運ぶ。きっと少女はもういない、そう実感した。
俺は池を飛び出した。帰る場所は確かにあの池だけど、少女が来ないなら自分から行ったっていいじゃないかと。
そして探し回っても見つからずに戻ろうとした時、ふと聴き覚えのあるメロディが耳を掠めた。

「あの子は……」

大きくなったが、すぐに分かる。ああ、あれはあの少女だ。あの歌は昔俺が歌った歌だ。
今でも彼女は、俺のことが見えるだろうか？

俺はぽちゃんと水に潜り、そっとそっと近づいた。水の中にいても声が透き通ってくる。思わず目を閉じた。

「久しぶりやんな。」

水面から顔を出せば、笑う少女の顔があった。

「気づいてたの？」
「おん、お兄ちゃん変わらんねんな。」
「ああ、河童だからな。」
「やけどわたしは変わった。もう河童さん見えんようになってしもた。」

え？と聞き返す。きっと今、情けない顔をしてるんだろう。

「せやから、行けなくなってん。今日は満月さかい、お兄ちゃんのことが見えるんよ。」

幼いのにしっかりとした口調で告げる。
大人に、なってしまったんだなと思って、俺は複雑な心境だった。
変わらない俺、そして変わっていく彼女。極端に言えば、彼女がお婆さんになっても俺はこのままだ。そして彼女には一生俺が見えない。
人間にでも変身出来れば良いのに。

「じゃあ、今日お別れしといた方が良いんだね。」
「まだ時間はあるから、一曲歌ってくれへん？」

俺は先ほど少女が歌っていた曲を歌った。そして少女は自分の話をした。

まるであの頃のように。

「もう時間やな。……今までありがとう。お兄ちゃんのことは忘れたことなんてあらへんよ。せやからお兄ちゃんも忘れんで？」

「当たり前だろ。大切な思い出、大切な親友なんだから。」

良かった、なんてまた笑顔で言うもんだから、俺も笑顔でいた。徐々に夜が開けていく。月も極々僅かに欠けてしまう。

「好きやで、お兄ちゃん。」

完全に見えていない様子で少女は綺麗に笑った。

俺の頬に、不意に涙が伝った。

それから。俺はたまに遠くから少女の様子を見に来る。

少女ではなくなる日までもずっとずっと、きっといつまでも。

いつか気付くかと淡い期待を寄せて、池で歌を紡ぎながら……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4506q/

満月夜水詩

2011年8月29日16時50分発行